様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １３ 日現在

機関番号：３２４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２３２１

研究課題名（和文）初期中世の内陣障壁（カンケッリ）とその装飾に関する研究

研究課題名（英文）Study on the decor of cancelli in the Early Middle Ages

研究代表者
奈良澤　由美（Narasawa, Yumi）

城西大学・現代政策学部・教授

研究者番号：６０２５１３７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：キリスト教の典礼空間において内陣障壁（カンケッリ）は、信徒の空間と聖職者が儀式を行う空間を区別する役割を担っている。本研究は、初期中世の内陣障壁の残存例の現地調査をフランス南東部を中心に行い、作例の形態、材質、装飾、由来する聖堂の歴史などのデータ化、分類、分析を進めた。また、うろこ模様、格子模様、ロゼット模様、組みひも模様など、内陣障壁に特徴的な装飾についての広範囲の資料・文献収集を行い、分析研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
初期中世の内陣障壁の大半はごく断片的にしか後代に伝わっておらず、その装飾が研究の中心テーマとなることは少ないが、初期中世のキリスト教美術を考察する上で最も重要な資料のひとつであることは疑いない。本研究はそうした初期中世美術研究における欠落部分を補充するための、第一次資料のカタログ化および装飾の分析研究の一環となっている。特に、地元工房の彫刻装飾の土着的側面についての考察を進めたことにより、初期中世の装飾モティーフの選択についてこれまで着眼されていなかった問題意識を提示しうると考える。

研究成果の概要（英文）：During the Early Middle Ages, the chancel, which separated the priests and the faithful, was considered to be one of the main sanctuary decorations. This study focuses on remnant sculpted chancel fragments, particularly in the South of France and Italy. I studied several specific decorative motifs for this liturgical furniture, including scales, rosettes, and interlaces, examining their origins, meanings, and local particularities.

研究分野：美術史

キーワード：内陣障壁　典礼備品　彫刻　装飾　初期中世　フランス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

キリスト教の典礼空間において内陣障壁（カンケッリ）は、信徒の空間と聖職者が儀式を行う空間を区別する役割を担っている。初期中世の内陣障壁は 1 メートル前後の高さを持ち、しばしば彫刻で装飾される。実際、行われる儀式に目を向ける信徒たちが眼前にする設備であり、その装飾は儀式を壮麗化し、ときに象徴化する。アプシスの壁面装飾などに比較して、内陣障壁の装飾が研究の中心テーマとなることは少ないが、それはまず、障壁の大半がごく断片的にしか後代に伝わらないがゆえであると推測される。しかし、起源の古い教会堂は多かれ少なかれこうした障壁の断片を保持しており、初期中世のキリスト教美術を考察する上で最も重要な資料のひとつであることは疑いない。進展が滞っている当該彫刻の第一次資料調査、および分析研究を進めることが求められている。

２．研究の目的

本研究課題は、初期中世美術研究における欠落部分を補充し、これまで着眼されていなかった問題意識を提示することを意図している。古キリスト教時代からカロリング朝時代へ、初期中世における大きな典礼空間および装飾の変革が行われるが、形態および装飾模様の分析から、初期中世の変遷及び地中海地域内の影響関係を考察することを目的としている。

カンケッリに使われる代表的な装飾モティーフのうち、以下のモティーフについての分析研究を特に重要であると考える。

うろこ模様および格子模様：古キリスト教時代、西方東方ともに汎地中海地域で使われている模様であり、透かし彫り内陣障壁の成立の問題ともかかわる。ローマ時代の世俗的・宗教的空間で用いられていた柵（木製や金属製）の形態の保持が推定される一方で、石棺の屋根などの装飾の反映が考慮される。初期のキリスト教聖堂に多用されているうろこ模様の直接的起源と普及の過程および象徴性については、これまでほとんど研究がなされてきていない。

組紐模様：カロリング朝時代、きわめて画一的な組紐模様の彫刻が内陣の装飾のために大量生産されるようになるが、その成立と普及についていまだ研究は十分ではない。初期中世の組紐模様の発展については、ゲルマン的装飾およびローマ時代のモザイク装飾との関連から考察されるが、いかにしてカロリング朝時代の典礼空間の装飾として確立し、イタリアからフランスにかけてどのように普及したのか。また、9 世紀から 11 世紀初頭の期間の組紐模様の年代推定は大部分が不確実なままにとどまっている。

さらに、古キリスト教時代にもっとも威信のある装飾モティーフのひとつであったブドウ模様、あるいは西ゴート起源と考えられているロゼット模様について、先立つケルト美術およびゲルマン美術との関係、さらにのちのカロリング朝時代の装飾模様にどのように保持されたのか、その形態変化と象徴性についての考察は興味深いと考える。

初期中世の彫刻断片の機能同定の問題に取り組むことも課題としている。彫刻断片が内陣障壁と同定されるに際して、その機能の同定はこれまで決して厳密ではなかった。その再検証を行い、今後の研究の進展のために国内外の美術史および考古学研究者たちが共有しうる研究データを呈示することを目標とする。

３．研究の方法

現地調査は、まずフランス南東部から始める。初期中世の内陣障壁が多く残っている都市・地域を選択し、調査・記録を行う。現地調査および資料収集によって、作例の形態、材質、装飾、由来する聖堂の歴史などをデータ化し、分類、分析を行う。

内陣障壁に特徴的な装飾についての広範囲の資料･文献収集を行い、分析研究を行う。広範な文献資料調査により比較研究を進める。比較検証のための地域としては、特にイタリア、北フランスが対象となる。

４．研究成果

ニーム（ガール県）のギュイヌメール遺跡の 2016 年の発掘調査により出土したカンケッリの石材遺物の研究を行い、報告書を発掘担当の INRAP（考古事前調査国立機関）に提出した（Y. Narasawa, « Deux piliers de chancel décorés », in M. Rochette (dir.), *Occitanie, Gard, Nîmes – 1 Rue Guynemer : une nécropole de la fin de l'Antiquité à l'origine d'une église paléochrétienne*, Rapport d'opération de fouille archéologique, Inrap Méditerranée, 2018, Vol. 2, Les études et analises spécialisées, pp. 56-60.）。当研究に伴い、遺跡の古キリスト教遺構の床構造と機能について考察し、墓が密集した至聖所の囲いであったか、あるいは何らかの特権的な墓の囲いであったと推測。同遺物の年代比定のために、ロゼット・モティーフについての広範囲の分析研究に着手した。

ロゼット・モティーフについての分析研究は、本研究期間全体を通して行った。前ローマ時代、ローマ時代、初期中世のガリア地方における同モティーフの形状、分布、象徴性について、資料収集、分類、分析を進めた。この研究調査により、ロゼット・モティーフの長い時代にわたる普及と、特にガリア南西部への分布の集中状況が確認された。比較研究のためにニームの博物館倉庫に保存されている初期中世の石棺群の現地調査（写真撮影、測量）を実施、その比較研究として、「メロヴィング朝時代」とされるガリア北部の石棺群の調査を進めることとなった。また、ローヌ川下流地域での 6～8 世紀の同モティーフの彫刻群が確認され、その現地調査も進めた。また、地元工房の彫刻装飾の土着側面と古代伝統の側面の分析研究をさらに深めるために、イングランド北部のリーメス地域の古代末期の彫刻遺物について現地調査を行った。初期中世の地元工房の彫刻装飾のより土着的側面について分析研究を広げていった結果、各地方の古代の技術と装飾の記憶と変容、そして土着的な美術の源泉についての問題意識を明確に持つようになった（「初期中世美術における『古代』、『古典』、『擬古』　―　南仏の事例を中心に」シンポジウム「西洋美術史における〈古典〉と〈古典主義〉」2018 年 7 月 14 日　名古屋大学）。

また 4～5 世紀に数多くの例が知られているうろこ模様および格子模様の内陣障柵の起源を考察するために、紀元 3 世紀以前の「柵」について、図像資料および考古資料の収集を進めた。暫定的な結論として、木造ないし金属の柵を模倣した石造の柵が古代ローマの世俗領域にすでに広く使用されており、その形態がキリスト教の設備にも転用されたことは確かであるが、これまで資料化され出版されている作例の少なからぬ事例が、異教・キリスト教起源か、あるいは至聖所の囲みか聖人の墓の囲みか、区分されておらず、特にローマの世俗建築の領域などから発見されたカンケッリの断片については、実際には機能と年代が不明確な事例が大多数であり、再検証の必要性がある。一方、カタコンベの壁画装飾における「柵」図像の象徴性についてはこれまである程度研究が進められており、庭園（楽園）と墓地、また、聖人の墓や石棺装飾での柵模様について、それぞれに象徴性を読み取る試みは可能である。3 世紀のキリスト教墓地での柵（ないし柵装飾）の役割が 4 世紀の典礼備品装飾に一定の象徴性を与えたのではないかと推定される。

組みひも模様については、ゲルマン起源からロマネスク時代まで幅広い時代の調査を行った。カロリング朝期の典礼改革において、内陣部分が拡大し、装飾障壁の制作が活発となった時代、なぜ組みひも模様が特定の地域で頻繁に選択されたのか。画一的組みひも装飾の成立の過程がその分布に関係するであろうこと、初期中世の地元工房での装飾モティーフ選択に技術的理由が

大きいであろうことが推定される。メッツのサン＝ピエール＝オ＝ナン聖堂由来の内陣障柵彫刻群の装飾と年代の再検討が今後の課題である。
またリエズおよびディーニュ（アルプード＝オート＝プロヴァンス県）の古キリスト教時代および初期中世の典礼備品についての調査を継続中である。新発見についての情報交換をおこないつつ、最終研究論文の準備を行っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>奈良澤由美 | ４．巻<br>11 |
| ２．論文標題<br>リエズ（フランス、アルプ＝ド＝オート＝プロヴァンス県）の文化財発見の歴史とその活用の現在 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>城西大学現代政策研究 | ６．最初と最後の頁<br>71-85 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>奈良澤由美 |
| ２．発表標題<br>初期中世美術における「古代」、「古典」、「擬古」　－　南仏の事例を中心に |
| ３．学会等名<br>シンポジウム「西洋美術史における〈古典〉と〈古典主義〉」 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>奈良澤由美 |
| ２．発表標題<br>フランスの初期中世宗教文化財研究の現在～プロヴァンス地方の事例から～ |
| ３．学会等名<br>フランス史研究会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|